

フェミニズム的活動における権力の獲得について

荒 木 菜 穂

A Note about Gain of Power in Japanese Feminist Action Groups

ARAKI Naho

Summary

Feminist action groups like equal relationships. This type of relationship causes difficulties. If they have power structures, such groups may be able to easily resolve such problems.

The act of denying power structures fits with some feminist thoughts. However, this act prevents such groups from innovating. In other words the groups that can overcome these difficulties can continue to innovate and succeed.

In this paper I introduce what equality is, difficulties of equality and solutions for such difficulties in some women's action groups. I aim to identify a method where feminist groups can have power and capital and can influence gender structures.

Keywords: feminism, female groups, power, equal relationships

要 旨

フェミニズム的活動を行う女性グループでは、しばしば、権力構造を否定する関係性、すなわち、対等な関係性、「平場」の関係性が目指される。そこではしばしば、権力構造をともなう組織であれば解決されていたかもしれない困難が発生する。

権力や権威を否定することは、フェミニズム的理念にはかなうが、活動が力を持ち、持続、発展していく際には足かせとなる。しかしそれは、結果として、それらの困難を乗り越えたグループが持続、場合によっては発展、成功していることを意味する。

本稿では、フェミニズム的側面を持つ女性グループにおける平場の意味と、平場的組織のあり方の困難、その解決について、いくつかの事例を紹介する。女性が平場の関係性を持続させ、そこでの活動を発展させる力、場合によっては外部の何らかの構造に働きかける権力を持つためにはどういったことが必要であるのかを知る道筋のヒントを明らかにしていきたい。

キーワード：フェミニズム、女性グループ、権力、平場

1. フェミニズム的活動と権力

1-1. フェミニズムと権力

「フェミニズム」、とりわけ、ジェンダー権力構造に敏感であるところのフェミニズムは、同義反復的ではあるが、権力を嫌う。それは、男性中心的構造の中での女性を支配する権力への抵抗の「力」を獲得する運動であるとともに、女性たち自身が、権力の発動をとまなう欲望を持ち、実現させることをも拒んできたとされるフェミニズムのジレンマでもある。権力の発動をとまなう欲望とは、経済的欲望や性的欲望も含まれる。フェミニズムのある派は、性別役割分業を根拠とした資本主義経済のあり方や、女性の低賃金労働を批判し、その構造の変革を求めてきたが、女性たち自身がその経済構造の中で成功をおさめようとするのを、構造を肯定することとして拒んできた。同様に、フェミニズムの別の派は、性的欲望に関しても、女性を抑圧し性的客体と位置付ける性の構造を批判するとともに、女性たち自身が性的欲望を持ち、その実現を求めることを、自主的に性的客体になる営みとして批判してきたとされる。近年では、こういった女性をジェンダー構造の「犠牲者」に位置付けるフェミニズムとは別に、ジェンダー構造の変革そのものを問わず、女性の活躍や欲望の実現を肯定する、リベラル・フェミニズム、もっと現代的に言えば、ネオリベラリズム的フェミニズムが、成功や欲望の実現を望む女性たちに支持される動きも見られる。

最終的には、ジェンダー構造によって奪われた女性の主体性を取り返し、女性のエンパワーメントを目指すはずであるのに相反する方法論を持つこれらのフェミニズムのジレンマや議論は、女性の性的主体性をめぐる議論や、労働現場での保護と平等をめぐる議論など、現代にいたるまで繰り返して生じている。アメリカの第三波フェミニズムに関する議論では、主に若い世代の女性たちによる、女性も男性同様に性的快楽の権利を求める主張にたいして、前の世代のフェミニストから、「女性全体ではなく、より経済的な機会のある白人中産階級女性にのみ当てはまるもの」(Heywood 2005, x vi)として、また、男性と

の関係においてリスクを負うことの少ない恵まれた環境から発せられたものであるとして、また、それにもかかわらず、そのような安全な環境を作り上げてきたはずである第二波フェミニズムを否定する動きであるとして批判される(Oakley 1997, 47)。また女性が主体的に欲望を実現させることがジェンダー構造の維持につながることは、ポストフェミニズムの文脈としても議論されている。菊地夏野はアンジェラ・マクロビーの論から、ポストフェミニズムについて、「『エンパワーメント』や『選択』という言葉がより個人主義的な言説へ転換され、メディアやポピュラーカルチャーのなかで、さらに国家の政策として、それらの言説がある種のフェミニズムの代替として展開されている」(菊地 2015, 72) 社会的状況であると述べている。また、ポストフェミニズムの特徴として、個人的な「『女性の成功』を称揚」し、「女性を弱者としてひとからげにすることで女性のエンパワーメントを阻害するというフェミニズムに対する否定的なイメージ」が持たれていること(菊地 前掲書, 74)を挙げている。そして、近年肯定的な評価がなされている「女子力」という言葉についても、「『被差別者、被害者、犠牲者』としての女性からの価値転換という意味が含まれていることが推測される」(菊地 前掲書, 83)、それが、ジェンダー構造への批判的意味を持たず、「女性の主体性」として従来の女性ジェンダー役割を再配置する内容である場合、フェミニズムが批判してきた権力構造を維持しつつ組替え不可視化するネオリベラリズムの政治経済状況の強化につながるのではないかと懸念する。

1-2. フェミニズム的活動にとっての権力

フェミニズムが権力を持つことを嫌う流れは、フェミニズム的意識を持った女性グループの活動の理念や実践にも影響する。フェミニズム的目的を持つ女性グループはしばしば、男性による、権力構造を伴うようなグループ形成とは異なる関係性を志向し、またジェンダー構造における役割や関係性からも自由になる可能性を持つとされる。明確にフェミニズム的意図を持ったグループのみを扱っているわけではないが、女性グループの特殊性、可能性に関する先駆

的な研究である上野千鶴子による「女縁」への言及では、「明確な組織を欠いた女縁集団には、代表や会長などのフォーマルなリーダーはいないが、言い出しっぺがインフォーマルなリーダーになる」「インフォーマル・リーダーは、関係を調整し、集団目標を設定し、雑務を引き受けるという実質的なリーダーシップを発揮する」（上野 2008 [1988], 67-68）といったその特殊性が記されている。そこでは、リーダーを決め、その権力を前提としたがトップダウン的な組織を作ることが否定されている。

しかし、ここで描かれているのは、対等な、しばしばその目標が共に「楽しむ」ことであるグループであり、明確なミッションを持ち持続や発展を志向する、または収益を上げることを目的としたグループではない。たとえば、行政から資金的援助を受けるか否かに関しては、「女縁内にも賛否両論がある。活動に枠ができるのでイヤという考えもあるし、行政のヒモつきはダラク、と考える厳しい意見もある」とし、大きな権力、そこからの経済的な支援を「よくないもの」とみなす傾向にあるという（上野 前掲書, 110）。

実際、権力関係の発生を拒む女性グループ、さらにはフェミニズム的意図を持つ女性グループが、アカデミズムや男女共同参画との連動なしに、持続性を持ち、活動として発展していったケースは多くはない。そこには、権力構造を否定する関係性、すなわち、対等な関係性、平場の関係性が求められ、権力構造をとまなう組織であれば解決されていたかもしれない困難が発生する。そして、結果として、それらの困難を乗り越えたグループが持続、場合によっては発展、成功していることとなる。以下では、フェミニズムの側面を持つ女性グループにおける平場の意味と、平場的組織のあり方の困難、その解決について、いくつかの事例を紹介する。また、2015年5月24日に開催されたフェミニスト・カウンセリング学会での同テーマでのワークショップ¹での参加者から提

1 『『女のグループ』再考～平場をめぐる理論の整理と平場の可能性～』（2015年5月24日フェミニスト・カウンセリング学会大会於ウィングス京都、実施：多様化社会を考える会、発題者：人見章子 荒木菜穂 加藤伊都子、コーディネーター：渡辺ゆうこ、参加者：20名の女性グループのメンバー経験者）

示された「女性グループを持続させるために必要なこと」に関する意見も、参考関連項目として挙げていく。女性が平場の関係性を持続させ、そこでの活動を発展させる力、場合によっては外部の何らかの構造に働きかける権力を持つためにはどういったことが必要であるのかを知る道筋のヒントを明らかにしていきたい。

2. 平場の関係性

ここでの「平場」とは、大きくは対等な関係性という意味である。もともとベ兵連など社会運動の現場で使用されることもあったが、フェミニズムのコンシャスネス・レイジングの技法などとも連動し、70年代のウーマン・リブ運動や70年代後半以降の女性学の活動などに応用され、使用された用語である。すなわち「平場」とはジェンダー秩序に抵抗する傾向の強い女性グループにおいて志向された関係性であった。

2-1. 『女・エロス』の場合 1973～1982

(1) 平場の関係

日本のフェミニズム運動の先駆的存在であるウーマン・リブの運動の中で多くのリブ・グループが作られ、また、多くのミニコミ誌が作成された。ミニコミ誌は、思想や情報を伝えるメディアとしてのみならず、読者や制作者の関係性をも構築していくという意味で、一つの運動の形でもあった。中でも大きな影響力を持ったミニコミ誌に『女・エロス』があるが、その編集委員会で共有されていた「平場」の認識とそれがもたらす困難をまず挙げてみたい。

まず、この編集委員会での人間関係が、「平場」であったことが確認される。

(三木) 理想やね、『女・エロス』の初期の人間関係ってのは。いまだに女の人間関係の理想。／まったく違いながらおかつお互いを尊重して、認め合って、同化しない、だけどいっしょにできるっていう関係 (三木他 1996, 296)

しかし、「平場」であるがゆえに、その活動はトップダウンの組織ではなく対等なメンバーによるボランタリーなものとなる。そういった活動の形態は、「平場」の理想ではあるものの、利益を生む活動ではないことが前提であることが述べられている。

（加納）でも、たんなる集団ではなくて、商業出版やるとなると能力や効率が問題になってきませんか。／（三木）商業出版いう意識はあんまりなかったね。／（佐伯）お金が全然もうからないから、もう全部がボランティアよね。／（三木）誰かがそれで食べてて、どうしても利益をっていうことになったら大変だったけど。（三木他 前掲書、296-297）

こういった、金銭的問題と活動との関係については、前述のワークショップにおけるグループの持続のために必要な事項の意見でも、「利害（金銭 etc.）が発生していくプロセスでの合意確認」という形で提示されていた。対等な関係性であるためには、利潤を上げ、配分する義務を伴う関係が発生しないことが理想ではあるが、とはいえ、それは経済的な力を持つことそのものを否定せずとも、そのプロセスの合意確認で両立可能なことであると読むこともできる。

（2）共同体的しがらみとゆるやかなつながり

また、リブセン（注：新宿リブセンター）といった運動体としての「平場」の関係性が例に挙げられ、目的意識でつながるいわゆるアソシエーション的つながりではなく、生活そのものを共有するコミュニティ的つながりであることとそのしんどさが語られる。そして、「平場」でありながらも編集・出版といった目的でつながる編集委員会との違いが述べられている。

（吉清）リブセンなんか共同生活だからもうそれがきびしいわけよね。襖をぱたんと閉めたら、そこにもう女の過去があって、女の歴史があって

という、そんなのしんどいわけよ。／（三木）「女・エロス」というグループ意識ある？ないよねえ？私はないわ。／いろんな運動体もあってリブセンもあって、そういう人たちのいろんな主張を自分たちは雑誌で出版して、みんなに供給していく役割してるって感じで。（三木他 前掲書、297-298）

ここでは、「平場」の関係がメンバーのプライベートまでを侵害するものである限りは、それはつながりを強化する一方、メンバーを疲弊させる可能性があることが示され、活動の目的や役割を明確に持ち、そこそこのメンバー間の距離感を保つことのメリットが示されている。

（3）権威になる可能性

このグループの特徴は、編集・出版を行うことであるが、この活動のあり方が、編集者対読者、という形で、他のグループや思想の共有者にたいし、権威となる可能性もあることにも言及されている。「平場」の関係とされている活動は、その活動内容によっては、活動内、または他の「平場」的活動との関係において、権力を持つてしまうこともありうる。同じくフェミニズム的目的を持った出版物である日本女性学研究会『女性学年報』編集委員会においても、同様の指摘がなされている（荒木 2012）が、この、権威となることへの敏感さは、「平場」の活動持続のためには重要な論点であると考えられる。

（加納）全国的なメディアをもつということは、本人たちの主観とはべつに権威になってしまうということはないですか。／（三木）それは活字信仰がある人よ。わたしらそんなふうに思わないもの。／（吉清）私たちが思っている以外のものはあまりよくわからないよね。私たちの意識と外から見られている部分とは違うでしょうね。／ただ、あとから『女・エロス』の編集委員になった人がそれを価値があることみたいに思っているように感じたことがあって、えっと思ったことはあった。（三木他 前掲書、

また、フェミニズム的主張を行うグループである（かつそれを大きく発信する）という特徴が、従来の女性にたいするジェンダー役割の押しつけに代わる、新たな抑圧を産む可能性も示唆されているが、こういった新たなポリティカル・コレクティブの問題は、受け止める側の問題であるとして片づけられている。

（加納）でも、逆差別ってのもあるわけですよ。籍入れて結婚してて子どももいて、なんかこんなんじゃないかだめんじゃないかと思っている時にぽーんと「婚姻制度を揺るがす」っていわれたら、揺るがさなきゃいけないと思うじゃないですか、やっぱり、なのに揺るがせない私は何だろうと思うと、逆に権威になるわけですよ／（三木）権威かどうかは私らの問題ではなくてそう感じた人の問題なのよ（三木他 前掲書、298-299）

「平場」の活動が権威となることは、1で述べた女性と権力の問題にも通じることであるが、活動の持続にとっては大きなジレンマである。なぜなら、権威となることは対等な関係を崩す意味で非フェミニズム的であるが、しかし同時に、権威であることで活動がパワーを持ち、発展し、持続可能となることも十分に考えられることであるからである。この点について、ワークショップでは、『戦略』を嫌わない（「清貧・清廉」自慢をしない）「想像力を持つ できない人を責めない」などの意見が出された。前述の『女・エロス』編集委員会の言葉と合わせると、権力関係ができてしまうことには当然注意が必要ではあるが、「権威」とみなされるかどうかは外部からのレッテルによるものが大きい。そういったラベリングに負けない、割り切った戦略が必要であるということでもあるように思われる。

2-2. 日本女性学研究会の場合 1977年～現在

日本女性学研究会は、その活動案内において「平場」であることが掲げられている、1977年より続く女性学のグループである²。グループのニューズレター Voice Of Women より、「平場」に関する議論が述べられた箇所を紹介したい。

(1) 活動内における女性の同一性と差異をめぐる対立と調整

まず、女性の同一性に着目するか女性間の差異に着目するかというフェミニズムの古典的な問題に言及されている。女性の同一性の強調は、女性運動の主張を明確化させまとまりを生む一方、多様な女性を一枚岩的に捉える危険性を持つ。また、女性の差異の強調は、多様な女性を認める意味がある一方「女性の連帯」を目指すフェミニズムのあり方との齟齬を生む可能性を持つ。会では、どのように女性の連帯と多様性との間の矛盾を回避しようとしていたのか、また、双方を両立させる関係性の方法論や、それが実践される場はどう想定されていたのか。

とびかう女性問題全般にわたる話題は、どれも私の疑問や不満に通じるものであり、私はその場にいることで連帯感を感じることができた。【「かけだしの頃の WSSJ と私」(1987/7 Vol. 83)】

女友達と話し合うと、たとえ意見が食い違っても根本のところを通じ合えるものがあって、心が落ち着く／わかり合えるよるこびがある。本当にしんどい時など、救われたような気分になる【「9月16日一例会に参加して〈極私的〉に感じたこと」(1990/11 Vol. 116)】

2 (案内文より) この会では、現在の社会に存在する上下関係や権威構造を否定し、代表者や一切の「長」をおかず、対等な個人の合議制による運営を行っています。私たちは共に語り、考え、行動することによって、私たち自身の、そして社会の変革をめざしています。

この研究会の良さは、さまざまな立場の人がいることです。子どもを持つ人は、子どもの親の立場から。経済・社会問題を研究している人は、各自の研究分野から。学校制度の現場に立つ人は、教師の立場から。次代を担う子どもに対して、先に生まれたものの責任の立場から。【「新しい分科会の呼びかけ！『学校教育と女性学』（仮称）」（1987/4 Vol. 80）】

だが、一つの会の中に沢山の論が同時に存在することは、とりもなおさずこの会の懐の深さを示すものだと思う。何故ならそれは皆が一斉に同じ方向を見るのではなく各々が自前の正論を持ちながら一つの事を成就してゆくことにも通じ、それが真にリベラルな女性学研究会の姿なのだと、考えるからである。【「研究会10周年パーティーのゆくえ」（1987/2 Vol. 78）】

以上の引用からは、同じフェミニズム的活動に参加していることで得られる連帯感や安心感、救い、経験の共有、「同じ仲間」であることのメリットを感じつつ、特定の主張や価値観を皆が共有することではなく、多様な個人が多様な価値観を持つことが、フェミニズムの行う政治にとって歓迎すべきものとして受け止められていることが示される。また、多様な個人間の調整には、単に女性の経験を共有することではなく、多様な経験を語り、他者である女性との差異について考え一個人が複数の視点を持つコミュニケーションが必要とされた。この調整は、一つのフェミニズム的主張を女性たちに押しつけ、新たな抑圧となるポリティカル・コレクトネスの危険性を回避する手段でもあるといえよう。

「かわいそうな他人」を救ってあげる運動の嘘っぱち【WOMEN OLOGY 1『趣味的女性学研究』】（1980/3/4合併号 Vol. 6&7）】

70年代の終わり、私達はお互いに出会わずにはいられなかった。個の自

覚と女の置かれた状況との間のギャップへの疑問を吐露し、分析し、確認し、共有を求めている。【『アウトプットの時代』 窓をあけようネ、遠くまで行くために。】(1987/12 Vol.87)】

この時期、会にやってきた人は強弱はあっても、表現のしかたに違いはあっても、それぞれが自分の生き方を模索していた。／お互い実に率直に物の言える間柄であり、その指摘に「成程言われてみると、その通りだ」と頷けたのは、実に密なコミュニケーションがあったからだろう【『日本女性学研究会』との巡り会い】(1987/9 Vol.84)】

さまざまな女性たちの生き方に出会い、共感し、反発し、感情的にもなり、自分の生き方そのものも揺さぶられることもよくあった。／そしてその結果としていろんな差異を受け止めることを学んだ。【『シスターフッド』連続体】(2002/3 Vol.229)】(2002/3)

他人をも自分のレベルにひきずりおろしたい衝動に駆られており、ついでに更に被抑圧度の高い人たちに理解を示して、己れの居場所を居心地よくしたいだけなのかもしれない。【『女性学研究会に参加してみようこと』(1980/7 Vol.9)】(1980/7)

ゴメンだね、と思いながら<良い子>像に合わせそうになる自分をときどき発見しますから。／わたしのフェミニズムはそのもどかしさから始まっています。【『良い子にさせないフェミニズム』(1994/2 Vol.148)】

ワークショップでも、どんな女性であっても、連帯できるという心強さ（「それぞれの居場所がある、どんどん出番をつくって伝える」「仲間を愛する、あたたかい目でミスを許す」）、どんな状況下の女性であっても受け入れる基盤があること（「待てること」「変化を受け容れる」）が、「平場」の活動の持続につ

いて重要なこととして出されていた。

(2) 女性学的組織のあり方をめぐる対立と調整

しかし、女性学という学問を確立し、教育的活動を継続していくためには、対等な関係性だけでは困難な側面もある。会としては、女性の多様性を認めるスタンスから対等な「平場」を志向してはいたが、理念としては共有されるものの、実際に対等な関係性を持つ組織の構築となると、困難を伴うということである。

「女性学をやっていくことと、研究会の組織や運営のやり方とは不可分」
【1980年頃のこと】(1987/10 Vol. 85)】

一方では、理念よりも実践力を重視し、すなわち男性優位であり女性差別的な権力構造を社会に知らしめ、抵抗の政治を行っていくためには強い組織が必要とする意見が見られた。

女性の社会的状況の改善というような目標のためには、女性学を研究する仲間が多様で多数であるほうが集団として強力です。／大きな集団であることをめざすならば、それなりの対応が必要です【「何をするか、そのためにどうあるべきか01 日本女性学研究会の課題」(1981/1 Vol. 13)】

しかし他方では、以下のように、トップダウン式のピラミッド構造を求める立場を、権威主義であるとする批判があった。それらは、批判で終わらず、組織の中に社会的立場の異なるメンバーが含まれ、発言権や意志決定の方法をめぐりむしろ活発な議論が行われるという流れにつながっていった。

「フェミニストは主張に違わぬ生き方をせよ」と求めるよりは、「人は矛盾に満ちた存在。でも、だからといって、特定の属性を持った誰かが他者

を支配・抑圧していいということにはならない」と考えた方が現実的だと思うのですが、どうでしょう。【『VOWWWW ホームページプロジェクト速報・フェミニストの本音とたてまえ?』(1999/1 Vol. 198)】

評論家、大学教授、といった人々からなっていた旧理事会と、一般会員からなっていた旧運営会との関係が、上下関係的構造を成していた【『1980年頃のこと』(1987/10 Vol. 85)】

ごく普通の女性達もが関り合え、自立・主体性確立を一人ひとりの女性が自分のものにしていく時、はじめて社会運動体として地につき、しかも永続性のあるものになるだろう。【『『女性学』はだれのもの?』(1980/11 Vol. 11)】

組織のあり方をめぐり対立する立場間に、抑圧と被抑圧の関係性が生じていることに多くの関心が向けられていたが、換言すればそれは男性中心主義社会の中での規範とは異なる、集まりや関係性についての考え方の模索でもあった。

ワークショップにおいても、グループの組織としての運営に関し、上下関係を作らず言いたいことが言える(「パワーの行使に敏感 濫用しない」「これっておかしいんじゃないの?」)と言える「強制しない」「『傷ついた』で終わらない」など)の意見が出されていた。「平場」であろうとするためには権力構造が生じることを否定するが、しかしそれによる意思決定機能の脆弱化、すなわち実践力を失う危険性を回避するため、様々な取り組みがここでも模索されていた。

(3) 実務の負担の有無と発言権をめぐると対立

この会では、結果的に、権力関係を有する「ピラミッド構造」は解体されたが、実質的な事務を担う「運営会」の発言力が、他の会員にとって抑圧的にな

るのではないか、という新たな「権力関係」の軸への懸念が起こる。

出席できる人の個人的参加であって、関連分科会等の意志を必ずしも代表していない問題があります。／そのため、遠隔地に住む人や多忙な人の意志が十分伝わらないおそれがあります。【「日本女性学研究会のありかたについて」(1982/2 Vol. 25)】

会が『ヒマで声の大きな人々』によってひきずられている。という批判【「●●さんに全面的かつ徹底的に反論します」(1982/2 Vol. 25)】

そういった、実務を担う人々が大きな発言権を持つ歪みの指摘にたいする反論は、手を出すものが口を出す、他人の代弁はしない、という活動の原則を根拠になされている。「平場」であるゆえ、すべての主張が同列であるならば、どこで意思決定を行えばよいか。そこには、実際に活動にどれだけ関わったかどうかにか比例する決定権が採用され、また、「誰かがそう思うのではないか」という批判は無責任なものであるとして断罪される。

「より多くコミットした人が、より大きな責任を引き受けて、自分の意見を反映させていく」【「●●さんに全面的かつ徹底的に反論します」(1982/2 Vol. 25)】

「何よりも大事なこととして私達が学んだのは、「自分達の意見は自分で言おう!」「誰もが代弁に頼るのはやめよう!」そして自分の意見は自分で言うために、誰もが代弁に頼らないために「人の代弁はよそう!」ということ。これがここで言う「直接民主主義」です。」【「△△さんの公開質問状 (VOW No. 26) への返信」(1982/5 Vol. 28)】

誰かの代弁（それも想像上の）としての意見を言わない、という姿勢は、女

性の同一性に重きをおかず、多様性を重視する会の姿勢にも通じる。ここでは、「女性として」他者の代弁を行わず、その上で、多様なポジショナリティにある個人が自分の意志で動き、他者と関係する、という実践的な方法論が模索されていた。

(4) (逆に) 一部の会員への実務の押し付けをめぐる対立

また、(3)の事例とは反対に、「収入のある仕事や社会的地位」にあるゆえの多忙を理由に、仕事や社会的地位はないが時間のある会員に実務を押しつけているという状況への問題提起も行われていた。互いに対等であり、仕事は「誰がしてもいい」という活動にほぼつきものであると思われるこの困難は、「平場」の理想と現実を如実に示しており、その持続、発展に大きな影を落とす。

つまり時間と労力に融通のきく者のところにしわ寄せがきやすいことになる。あるいは性格的に、完全主義者のな者とか、責任感義務感のものすごく強い者とかということも関係するかもしれない。【「前号の◆◆さんの提言の一部を受けて『ある問題提起－ある事実から』」(1980/10 Vol.10)】(1980/10)

ワークショップにおいても、対等な関係が一部のメンバーへ負担を強いる結果にならぬよう、「利害(金銭 etc.)が発生していくプロセスでの合意確認」「運営、企画を丸投げしない」「個人の中で優先順位をはっきり」といった意見が出された。とりわけ三点目の、「個人の中での優先順位」は、「平場」の活動は、個人の尊重よりも優先するものではないという、重要なことを再確認させることとなる。

3. フェミニズムがフェミニズムをつぶさないために

フェミニズムは、権力構造、権威を否定し、フェミニズム的活動がその構造

にたいする批判的力を持つことを肯定する。しかし他方で、現状の権力構造下での実践力を培うプロセスへの賛同は歯切れが悪い。しかし、フェミニズム的な女性の活動が持続、発展していく際には、資金、資源、マンパワーの獲得にもつながる一定の権威、場合によっては権力が必要となるときもある。対等な関係を維持しつつ、権力の発生をどの程度まで、どの範囲まで認めるか、そういった信頼関係や日々の調整が、活動には欠かせない。こういった調整する権力のあり方は、ジェンダー構造変革のための原動力となりうる。フェミニズムの持つポリティカル・コレクトネスやいかなる場合も対等を求める側面は、時としてフェミニズム的活動からパワーを奪う。しかし、その際のオルタナティブは、既存の権力の肯定ではなく、権力を調整するプロセスそのものへの評価ではないだろうか。ワークショップでは、ほかにも、「共有、共感だけで終わらない」「責任を負うことへの恐れを持たない」「自他の境界線をひく＝自分の領域に責任、自覚を持つ」といった意見が出された。女性ジェンダーのあり方、女性の置かれている社会構造に目を向けつつ、そこでの犠牲者としてではなく主体性を持つ存在と女性を位置付け活動を行う。今後、多様な女性の活動の多様な側面に着目し、ネオリベラリズム的権力構造に回収されず社会変革につながるパワーの獲得の実践を集めていきたい。

参考文献

- 荒木菜穂, 2012「ぶつかりあい調整しあう、女性学的実践：オンナが関係し合う場としての『女性学年報』」『女性学年報』(33)、日本女性学研究会「女性学年報」編集委員会、156-176
- Heywood, Leslie. 2005 "Preface". *The Women's Movement Today: An Encyclopedia of Third Wave Feminism*. Greenwood Press: xi-xii
- 菊地夏野, 2015「ポストフェミニズムと日本社会—女子力・婚活・男女共同参画」越智博美・河野真太郎編『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」』彩流社、67-88
- 三木草子・佐伯洋子・舟本恵美・吉清一江・加納実紀代(司会)1996「『女・エロス創刊』メンバー座談会 あのエロスに満ちた日々よ!」女たちの現在(いま)を問う会編『銃後史ノート8 戦後篇 全共闘からリブへ』インパクト出版会、274-283

Oakley, Ann, 1997 “A Brief History of Gender” Ann Oakley and Juliet Mitchell, *Who’s Afraid of Feminism?: Seeing Through the Backlash*, THE NEW PRESS.
上野千鶴子 『「女縁」を生きた女たち』 2008 [1988] 岩波書店